シなばもろとも

藤森みょず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シなばもろとも

【Ｎコード】
Ｎ７１０４Ｗ

【作者名】
藤森みょず

【あらすじ】
何の兆しも無く、突如現れた複数のゲート。間も無く地上に大量の化物が沸き出した。蹂躙される中、人類は各地でそれぞれの存亡を懸けて応戦。多大な被害を出しつつも、地上に蔓延る化物達の多くを殲滅する。直ちに災厄の原因であるゲート破壊の為に動き出すも、良い成果は上げられず、数多の時が流れた――――。相も変わらず抗争は続くが、多少落ち着いてきた世界で、人と化物はなにを描くのか・・・・・・。

001　化物共に告ぐ

＊＊＊＊＊＊［ｎｕｌｌ］

はじまりはいつも、目が覚めるところからだ。

木々の温もりは暖かく、胸いっぱい吸い込んだ空の香りは生命（いのち）を感じさせる。

陽気な太陽は惜しみなく光を注ぎ、世界を灼かんばかりに照っている。

にもかかわらず、今日は寒気がする、ついに冬とやらでもきたのだろうか。それにしては枯葉が見当たらないのが気になるところだが、我が胃袋様の主張が激しすぎてすぐ忘れてしまった。

甘い匂いが漂ってくる下に目を向けると、母さんの姿が見えた。朝食を作っているようだ。

どうも胸のざわつきは消えないが、腹が空いているからだろう。そうに違いない。

「おはよう、母さん」

「おはよう、エル。気をつけて降りといで」

いつも通りの、なんてことない挨拶だ。

エルは軽く伸びをしてから、樹の朝露をすくい手に塗る。乾燥した手では降りる時いつ滑るか分からないからだ。

こんな七面倒と思わなくもない事をしてまで樹の上で寝て朝になったら降りるのには意味があり、獣に襲われない為だとか。だから落ちて怪我でもしたら本末転倒だ。

ふと村を眺めると、いつもと違う景色が見えた。円形の村で、森

に囲まれていてどこまでが村なのか区別がほとんどつかないところ、それでもちんちくりんな柵を立ててなんとか判別してるところ、そしてマチにはあるというイエが無いというところ等は、見慣れた景色だ。
違うというのは男性、特に成人が見当たらないことで、いるのは女性やお年寄り、そして子供だけだということ。

樹から降り、母さんに聞いてみることにした。
「父さんはどこ？　村の男の人もいないよね」
いつも早起きなのに待っててくれる、優しい父の姿が見えなくて少し不安になる。食事は家族三人そろって食べるのが習慣なのだ。
「エル、今日は大祝祭の前日よ。明日に備えて狩りにいったわ」
そういえば、そうだった。
大祝祭とは……ってなんだっけか。確か、祝って祈ってたくさん遊ぶ日の筈だ。
どうもはっきりしないが、食欲と誘惑に脳が負けた。
「さあ、冷めちゃう前にいただきましょうか」
「うん！」
そうしてエルと母は互いの手を重ね、『いただきます』――これも習慣だ。
木製の丸型テーブルの上に並べてあるのは、ふわふわのパンと、野菜の甘くて温かい匂いがするシチューだ。
さっきから催促して止まないのがいる。みっともない音を立てまくっているこの腹だ。でも、どうやって食べようか。パンをシチューにつけて食べるのもいい。別々で食べるのもいい。それとも――。
少し悩んだ末、思いついた限りやる事にした。
本当にうまくて、あっという間に食べてしまった。腹を満たすとなぜか一安心してしまうのは不思議なものだ。
『ごちそうさまでした』

午後は、これといってすることもないので散歩したり、鍛えたり、ごろごろしたり。のんびり過ごすのも悪くない。

そうこうしている間に夕暮れになった。それから少し風も出始めた頃、村の男達が帰ってきた。

彼らが持っているものは三者三様で、魚、獣、木の実――など自然の恵みがたくさんあった。中でも、人面の大型獣を見た時は笑いが止まらなかった。持ってたのが父さんというのもある。

父さんは傷一つ無いようで、ほっとした。やはり、家の父さんは強いのだ。みんなが言うには『力強くて、迷いが無く大胆。その癖冷静で――』憧れるんだとか。

「おかえり。怪我とかしてない？」

「ああ、大丈夫だ。この通りぴんぴんしてる。心配かけてしまったかな、すまん」

ぴんぴんどころか、擦り傷一つ見当たらない。村の外は危険が多く、狩りに行った人達の大半が治療を受けているのに。

これから待っていた村人総出で、男がとってきたものの仕込みをする。仕込みは村中央にあるモニュメント付近で行う。

そこでは小さなお祭り状態になった。人が集まれば、それだけで祭りになるくらい村人は陽気だ。踊ったり、歌ったり、芸を披露したり。

皆楽しそうだ。笑い合って、おいしいご飯の準備して。

だから、だろうか。誰にでもなく、祈るように、空を見上げて願ってしまうのは。

『こんなに幸せな日がずっと続きますように』

当たり前だ、続くに決まっている。

きっと明日は良い日になるだろう。なってくれよ、お願いだから。

不意に目から熱いものが込み上げてきた上、いつの間にか体が震えていた。きっと、冷えてきたからだ。そうに違いない。風も吹い

てるし。
「どうしたの、大丈夫？　お風呂入って、今日は早めに寝ておきなさい」
お風呂というのは、村の浴場のことだ。
「何かあるならちゃんと言うんだよ」
両親を心配させてしまったようだ。父も母も気遣わしげにエルを見ている。
心配させてしまったな、今日で最後なのに。
「大丈夫だよ、父さん、母さん」
そう言ったものの、頭に何かが引っかかってしょうがない。忘れてはいけないような、何か。

――最後？

そうだ、最後。
何が？　……おかしい。
歯の根は合わなくなり、カチカチ音を立て始めた。震えも一層激しくなってきた。動悸がする。心臓は壊れたポンプのようだ。
ここに居ると更に心配させてしまいそうなので、思考停止してお風呂場に急行した。
湯につかると、やはり余計な事を考えてしまった。
どうしてあんなに震えていたのか。恐くなったのか。やはり、単に寒かったのか。チリでも目に入ったのか。
結局エルは、はっきりした答えを出す事ができなかった。だから、忘れよう。忘れてしまおう。
お風呂から出て、樹に登りいつもの布団にくるまる。
「おやすみ、父さん、母さん。――どうか安らかに」
その日、悪寒が消える事は無かった。

おわりは、いつも――。

悲鳴やらなんやらたくさん聞こえてくる。はは、おかしいな。今日は楽しくなる筈だ。それなのに。

「化物！　やめて、助けて！」「こっちに来るな！　消えろ、化物！」「いやあああああ！」「……嘘だろ」「樹も登れるのか！？　くそっ、おしまいだ！」

どうして悲鳴なのだ。剣戟や怒号も聞こえる。笑い声じゃないのか。

いや、笑い声も聞こえる。化物と狂ってしまった村人達だ。あんなに陽気で明るかった村人達の顔が、酷く歪んでいる。

分かっていたのに。分かっていたんだ。いつもそうだ。こうなるまで、気づかない。思い出せない。

咄嗟に両親の姿を探す。樹の上は見通しが利いて、よくみえた。

両親は――母は、見当たらない。もう村の外に避難したのだろうか。いや、母は家族を置いてくような人じゃない。まだ村の中だろう。父はさすがだ。化物相手に懸命に戦っている。今も、軽々と扱う大剣で一匹の首を刎ねた。だが、苦しそうだ。相当無理をしてきたようで、動きが鈍くなってきている。死なせるわけにはいかない。すぐ加勢にいくから、もう少し頑張ってもらうとして。

――――エルは妙に醒めている。もう覚めているのだ。寝ぼけている場合じゃない。―化物を皆殺しに――じゃなくて、今度こそ家族を守り通さなくては。

「おっと！　危ない危ない」

刀身が湾曲しまくりな剣が弧を描いて飛来してきていた。化物が投げてきたようだ。

避けるのは容易いが疑問が沸いた。なんでこっち？　言っちゃ悪いが標的なら村にはいくらでもいる。

答えはすぐにでた。迂闊だった。当たり前の事だ。よく見えたら、よく見られるわけで。
化物が向かってきている。何にしても、樹の上じゃまずい。逃げ場は無いし、殺るにしても動きづらい。
そう思考しながら寝床に掛けてある剣を下に放り、空中に身を投げた。着地する時、両足を揃えて膝を右に曲げ、腰を左側に捻り、流れに任せて腿、尻、背中、肩と入ってから更に回転して衝撃を抑えた。頭が揺れて気分が悪いが、ふらついてる場合ではない。
父はまだ生きている、筈だ。母は無事だろうか。村は地獄絵図で「おっと」阿鼻叫喚の様子だが、今回は悪いけれど「っとと」無視だ。構っている余裕が無い。
だって、化物が二匹目の前にいるし。先程と同じ型の武器振り回してるし。
「邪魔だッ……！」
既に剣は手の中ある。先程落としておいたやつだ。化物が相手だと頑丈さに欠けるのが痛いところだが、文句を言っても仕方ない。
これまでの経験上分かってる事がある。この体では力不足なことだ。何と言っても、子供なのだから仕方がない。脆いのも注意が必要か。
それと、こいつらは――オルクだっけか。なんでもいい。化物全般に言えることだが、何回見ても反吐が出そうだ。
オルクは物凄く出来の悪い人形というか、胴体を極太にして両手足を極細にした人間だ。顔は人間じゃないけど。驚く事に、こいつらは極細の手足のくせに問題なく動くし武器も扱う。さらに、胴体はもの凄く硬い。ちょっとやそっとじゃ傷もつかないくらいだ。
まあどうであれ、オルクは頭が弱い。硬さと知能の二重の意味で。
二匹同時に相手するのは手間なので後ろに跳び退り、両手で剣を持つ。突き（ギャルド）の構えなんて上等なものじゃないけれど、それっぽく構える。そうして先に追ってきたやつの大振りを空振りに終わらせて

やって、タックルの勢い且つアッパーの要領で剣を突き上げる。中途半端な勢いじゃ刺さらないのだ。剣が折れたんじゃないかと思うくらい嫌な音がしたが、何とか頭を貫通したようだ。その証拠に、頭が噴水になったオルクの体が崩れた。
刺した剣はもう使えないので、今殺したオルクが持ってた湾曲刀――(と呼ぶ事にした)を奪った――ところまではいいのだが。

エルは思案に暮れていた。急に気になった事があるのだ。
どうして毎回出てくる化物が変わるのか。嫌いな化物順だったりして。まさかね。そういえば、前日も変だ。はっきり覚えてないけれど、どこかが違う。村はあんなにのどかな雰囲気だっただろうか。となると、この悪夢は記憶の再現でも無い？　そもそもどうしてこんなに複雑な思考ができる？　夢なのに。おかしい。普通に考えて。いや、夢だからいいのか？　いやいや、夢だからこそ？　でも、妙に現実感(リアリティ)があるし、でもこれは夢だし――夢夢夢夢夢夢夢夢
GOAAAAAAAAAAAAA！
「危ねえな！　だから邪魔するなって言ってるだろ！」
どう考えても、敵を前にして悩みだしたエルが文句をたれる筋合いは無いのだが、やけにむかっときた。思考は強制中断だ。
首を刎ねられる寸前に上体ごと後ろに反らし、勢い良く戻した反動をのせて湾曲刀を頭に突き立てた。その際吸い込まれるように刺さったので、驚いた。新発見だ、この湾曲刀は使える。
驚きをかみ締めつつ、絶命したオルクを蹴倒して刺した湾曲刀を抜き取る。そして、そいつが持ってたのも奪った。
これで武器は二本だ。これならあるいは……。
――急がなくては。

見渡せば、辺りは血の海だ。人間もオルクも多数転がっている。随分酷い臭いがするけれど、慣れてるし耐えれないほどじゃない。だが、やはり気分の良いものでないのは確かだ。

そんな中、たった一人でまだ戦っている人がいる。
「がああああああああッ！」
力強い声だ。やはり、あなたですか。
「父さん！　絶対に助けるから！　だから、死なないでくれ！」
父を囲んでいるのは、五匹のオルクだ。相手するには時間がかかりそうだが、もたついてたら更に増えるだろう。一気に攻めて逃げ道を確保しなくては。
そう思考しながら、エルは父の背後にいたやつに飛び掛り、頭頂部に湾曲刀を刺した。そして、頭から引き抜き際にそいつを蹴って右前方に飛び、二匹目の頭も噴水にしてやった。残るは三匹――いや、父さんが一匹殺ったから二匹か。
「エル！　どうして逃げていない……！　母さんはどうした！　俺はいいから、早く逃げなさい！」
そんな事言ったって、嫌だ。
「逃げよう！　父さん！　お願いだから・・・・・・」
まだ一度たりとも、家族を守りきれた事は無い。今回だって、父はぼろぼろだ。いつ死んでしまう分からない。
嫌だ嫌だ嫌だ、絶対に嫌だ。こんなふざけた夢なんて終わらせてやる。その為にも、両親を――。

大地が揺れている。ガンガンきて、まるで心まで震わすかのようだ。
この嫌な地響き。向こうを見ればオルクがどんどん来ているのが分かる。これじゃ多すぎる……！
「父さん！　あっちだ！　とにかく走って！」
「なにを言っている！？」
「早く！」
一緒に逃げたかった。でも、まだ母さんが見つかってない。探さなくては。

「――ぁぁぁぁぁ！」
何か聞こえた。悲鳴はいくらでも聞こえるが、妙に気になる。誰だ？
「いやあああああああ！」
意識したらはっきり聞こえた。まさか、そんな。
村の中心にそびえるモニュメントの上に立ってるのは。
「母さん！」「待ってろ！　すぐ行く！」
父さんにも聞こえていたみたいで、同時にエルと共に走り出した。全力疾走だ。両方とも絶対に死なせない。
モニュメントの高さは五メーテルくらいあり、母さんが登るときに使ったと思われる梯子は倒してあるみたいだが、高さ的にやはり心許ない。
退路（にげみち）なんて言葉は頭の中には欠片も無かった。必死だった。
オルクの突き出してくる剣を、腕を、次々かわす。左頬をざっくり切られたが、構ってられない。
もうすぐだ。もうすぐで、母さんのもとに。体が悲鳴を上げている。苦しい。だからなんだ。すぐ助け……に……？

変だ。おかしい。母さんがおかしい。目を凝らすと腹部から、なにかが出ている。
それは周囲を赤に染める――血だった。大量の、噴き出す血。先端の鋭く尖った槍が突き出ている。
モニュメント付近を見れば、素手のオルクがいた。
「くそったれ……」
また間に合わなかった。また助けられなかった。またしくじった。
そんな思いが心を支配し、体をうまく動かせなくなる。
転びそうだ。前がよく見えない。
泣いているのか。涙なんて流し尽くしたはずだ。
畜生！
しっかりしろ。そうだ、挫けてる場合じゃない。泣いてんじゃね

え。可能性は残ってる。まだ、父さんが生きてる！

だが、父は。そんなエルの思いとは裏腹に、怒り狂い、我を見失っていた。

「ＧＡＡＡＡＡＡＡＨＡＡＡＡＡＡＡＡＡ！」

それは、叫びというよりは咆哮だった。あるいは、悲鳴。

「ＧＹＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡＡｙｙ！」

父は猛り、恐れず、出鱈目な動きをしてオルクを次々屠った。突いて、薙いで、斬って、粉砕して――強い。とてつもなく強い、けど。

肉体の限界を超えた動きは、破滅をもたらしつつある。

全身から血が噴き出しており、目は焦点が合っていない。腕は酷使によるものか、ひっついてるだけのように見える。かろうじで大剣を握っているのか。

握ってなんかいなかった。大剣の左右の鍔が、手の平を貫通している。とんでもない出血だ。

父は力任せに体ごと振るう。オルクの胴に大剣が当たった。斬ったというより、それは炸裂した。大剣は少し刃こぼれしたものの、オルクの硬い胴が砕け散り、四散した。間も無く死を迎えるだろう。

だが、父も酷い。限界なんてとっくに超えてるだろうに。まずい、このままでは。もう遅いかもしれないが、本当に死んでしまう。すぐに手を打たなければ。

それなのに、エルは迷っていた。

父を止めて逃げないと、また手遅れになる。そんな事は分かっている。でも、それでも。

怖かった。こんなの初めてだ。父さんが、怖い。

村のモニュメント、母の亡骸下で大剣を振るうその姿は。

まるで――――化物じゃないか。

「あ……」
間の抜けた声がした。誰だ？　自分自身だ、馬鹿者め。
この村はもはや戦場だ。弱き者は死に、強き者だけが生き残る。
そんな中、立ち止まり畏れ逡巡する者が生き残れるだろうか。答えはノーだ。
オルクが、巨大な棍棒を振りかぶっていた。狙うは頭のようだ。
避けきれない……！
咄嗟に両腕を交差させて頭を守ろうとした。こんな腕では無駄だというのに。
刹那、破砕音がした。全てが砕かれる、二度と聞きたくなかった音だ。はっきりと聞こえた。

果たして、エルはどうにもならなかった。ただ、体が横に突き飛ばされただけだ。
すぐに周囲を見回す。
そこには――
「父……さん？」
目を疑った。
「なあ、父さん」
嘘だろ。
「なんで……なんでだ……」
そうであってほしかった。
あんな状態になっても、父は守ってくれた。
父を怖れた自分が嫌で嫌でしょうがない。
「うぁぁあああああアアアアア！」
村中にこだまする声。呪詛のごとく暗い絶叫。
その中心にいるのは、少年と化物。そして、人であったモノ。
彼はかつて父であったモノを揺する。反応は無い、即死だった。
頭蓋骨は割られ、脳漿が飛び散っている。

化物は叫びを聞いて集まってきていた。この村に残る最後であろう獲物を求めて、雄たけびをあげる。
それを意に介さず、彼は座り込んでひらすら呟いている。
「俺のせいだ。俺のせい」「かばわれた。何て惨めな」「まただ、また死なせた。護れなかった」
「父さんまで」「俺のせいか？　ほんとに？」「じゃあ誰のせいだ」
「ははッ」
彼は虚ろな目をしている。もはやその目は光を宿していない。
しかし、確固たる意志が存在し始めていた。それはあまりに暗く、重すぎるものだ。
「父さん、母さん、みんな。ごめん。俺が弱いばっかりに」
嘲っているのか、化物は嗤(わら)う。
エルには聞こえていなかった。
「許してくれとは言わない。そのかわり――」
「ふはははははッ」
笑いが止まらない。殺してやる、一匹残らず。殺し尽くしてやる……！
体が自分のものでないような感覚。見えない何かに突き動かされるかのようだ。軽い。疲れ果てた体が、こんなにも軽い！
どっかの神経が焼ききれたんじゃないか。そのくらい、ハイになってきた。
殺せ！　斃せ！　蹂躙せよ！　祭りの始まりだ！
――祭りは始まらなかった。気勢を削ぐような声がした。幻聴なのか、なんなのか。
『お前はまた逃げるのか』
「逃げてなんかいない！」
エルは反射的に返事をしていた。
『逃げてるさ。お前は狂おうとしている』

「狂ったっていい」
その声は諭すような調子で語りかけてくる。聞き慣れた響きだ。
『当時のお前はその程度だったか？』
「どういう意味だ」
『狂って、それでどうする』
「殺すに決まってるだろ！」
それでいて、一度鎮火させた火に油を注ぐように質問を続けた。
『だから、そんなに中途半端な気概だったか？』
「……」
『――化物共を無残に残酷に惨めに殺す。ただ、冷静に。生物として認め無いくらい簡潔に、あるいは――。とにかく殺す。そうだろう』
「……そう。ああ、そうだ。全く、その通りだ」
「夢だ何だって関係無いか。いいだろう、悉く殺ろうじゃねえか！」
いつの間にか声は聞こえなくなった。あれは間違いなく、エル自身の声だった。

落ち着けば視野は広がり、感覚はより鋭く、行動は迅速になる。
確かに、両親をまたも殺されたのは最悪だ。慣れるものでもない。だが、それで自分のやる事、したい事が変わるわけではない。
エルは決意を固めた。あとは動き出すだけだ。
「その前に、と。これだけは言っとく。寝てる真っ最中だろうけどな。ありがとな、俺」
体が熱い。蒸気でも出るんじゃないか。
心臓部は熱の塊だ。頭はフットーしてるだろう。焼き尽くされそうだ……！

オルク達はいい加減焦れてきたのか、動き出そうとしている。
「お前ら皆殺しだ」
その言葉が合図だったかのように、合図も何も無いのだが、オル

ク達は殺到しようとした。
遅い。エルは既に動いていた。
先程まで両手にそれぞれ湾曲刀を持っていたが、今は一本も持っていない。投擲されたそれは、邪魔だった前方のオルクの頭に刺さっている。
大剣を拾いに行くために投げたのだ。だから今、手にしている得物は父の形見――なんて言いたくないが、まさしく形見となった頑丈な大剣だ。
数匹殺られたくらいじゃこの化物どもは怯まない。最後の一匹まで戦うといった上等なものではなく、ただ頭が無いのだろうが。
そして無能は無能らしく、突進するようだ。一見どころか、何回見ても馬鹿だが、その物量は脅威だ。轢かれたらひとたまりもないだろう。
エルは構わず前に出た。どうせなら勢いがつく前に始末したい、とかそんな事は考えていなかった。とにかく視界一面を噴水にしたかった。
双方が衝突した。エルはまさしく嵐に飛び込む虫となったが、そこからは乱戦だった。考えるより速く体を動かし、直感に身を任せて転がり、次々来るオルクを斬って刺して抉って粉砕して、と周囲が死に塗れるまで繰り返した。
何匹に真っ赤な噴水をプレゼントしただろうか。長い間、といっても数分だろうが、結構な数を殺した。
辺りを見回していると、遠くにオルクの軍勢が見えたせいで血が騒いだ。だが、小休止だ。突っ込んで死ぬだけなんて勘弁だ。
エルは呼吸を整えつつ自分を見た。治療するためだったのだが、別の事に気が逸れてしまった。なんて様だ。血塗れで、形容しがたい変なモノがこびりついていて、生臭いし、汚らしいし、何者なんだろうかとか思えてくる。
――――ある単語が頭をよぎった。

憎しみの象徴であり、全てを奪った奴らであり、殺しても殺しても沸いてくる、ほら、あそこにもいるような――。

それは、あながち間違っていないような気がした。

でも、嫌だ。心が、魂までもが、その言葉を受け入れるのを強く、強烈に否定する。認めたら最後、なにもかも崩れ去るであろう、そんな気がする。

こんな時は止まってちゃだめだ。動き出せ。早く。考えなくていいようにしないと、際限（きり）がない。

大剣を数回素振りした後、覚悟を決めて走り出そうとしたのだが、この頭は未だに思考を止めてなかったらしく、ピンときた。

そろそろ夢の終わり（フィナーレ）だ。

地響きがする。それも、大勢の者が駆ける音を伴って。

やはり、このタイミングか。エルが限界に近い頃。毎度毎度、お決まりのごとくやってくる。

がしゃんがしゃん鎧がうるさいのもいつもの事だ。「――ぞぉぉぉおおお！」「おぉぉぉぉぉぉおおおおお！」

士気が妙に高いのもいつもの事だ。

手には思い思いの武器を。胸にはそれぞれの感情を。まとまらなくたっていい。ただ、立ち上がれ！

――化物狩り。それが彼らの名であり、愛称だ。彼らは名称などに頓着しない。

「お前らあぁぁぁぁぁあああああああ！　殺して殺して殺しまくれぇぇぇぇえええええ！」

「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」

「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」

ただ、憎き化物を殺すのみだ。

相変わらずだなと、エルがぽかんとしてると、やはり思った通りになった。

精神衛生上、先に言い訳しておこう。誰でもいい、聞いてほしい。別に、ぽかんとはしてたけど油断したりはしてない。あいつらが来たからといって、安心もしてなかった。だから、これも決まり事なのだ。

背中で重く鈍い音がした。あーあ。背骨がお亡くなりになったようだ。痛い。苦しい。息ができない。でも、とりあえず確認しなければ。

千切れそうな身をよじって後方を見た。決まり事の筈なのに、なぜか違和感を覚えた。

負傷の原因は言うまでも無くオルクだ。棍棒を投げたらしい。そんな事は分かってる。でも、何か違う。

――って近いぞぉぉぉおおおぁぁぁぁああああああッ！

声にならない叫びを上げてしまった。思ってたよりずっと近くに来ている。まずい、これじゃ挽き肉（ミンチ）にされる。

そんなのは御免被るので、芋虫みたいに這ったり転がったりしてとにかく化物狩り達の方へと移動する。動く度にぐずぐずのナニカがこびり付くし、体が、主に背中が悲鳴を上げるが、我慢だ。耐えろ。耐えて耐えて生き残――

「れ――？」

芋虫は芋虫の速度しか出せなかった。結局、そういうことだ。オルクの方が断然速かった。二足歩行とか反則だ。

考えるより早く、体が動いた。回転。生存本能に任せて、とにかく回転した。危なかった。

先程までエルのいた場所は、少々陥没している。オルクが鈍器を叩きつけたのだ。

止まったら死ぬ。エルは一心不乱に転がり続けて、たまに跳ねて

みたりして、その度にとてつもなく痛かったが、必死に化物狩り達の来ている方に近づいた。この際、全部無視だ。
本当に涙が出た真の涙ぐましい努力が実ったのか、どうやら彼らは気づいてくれたようだ。
「むっ？　……生存者ありだ！　保護しろ！　死なすなよ、守りきれ！」
「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」「応ッ！」
見目たくましい数人がこっちに走ってきて、エルの横を駆け抜けた。
体当たりだ。盾を前に構えて、近くのオルクらを跳ね飛ばした。そして若干遅れてきた者達が、それぞれ手に持つ武器で頭を破壊した。
華麗な連繋だった。まとまらなくていいって、十分まとまってるじゃないか。

何かが聞こえる。
「大丈夫か？　って――。――怪我――、分から――。」
うまく聞きとれないが、多分怪我はどこかとかそういうのだろう。とりあえず返事をしようとしたら声にならなくて、自分でも意味不明だったのだが向こうは背中だと判断したらしく、負担がかからないように運んでくれた。
安全そうなところへ運ばれると、白魔術師（しろマギ）が治療に取り掛かってくれた。痛みが消えていく独特の違和感と眠気すら感じる心地よさを感じたが、少しは頭が冴えてきた。
「ありがとう」
うまく喋れただろうか。どういたしまして、と聞こえた気がする。
そこで、誰かが歩いて来たのは分かった。
「あらかた片付いたな。さて、いきなりで悪いが――聞きたいことがある」
その声は聞きなれすぎてて、返事をする気が起きなかった。

「……」
「あぁ、意識がプッツンしそうなのか。なら、返事はしなくていい。一つだけ質問させてくれ。イエスなら右に、ノーなら左に転がってくれ」
一つ？　もっと聞くことがあるんじゃないのか。そもそも、隊長がこんな事してる場合なのか。そんなエルの疑問など知らないし、気にもしないだろう誰かさんは続けた。
「これからお前はどうする？」
イエスともノーともいえない。こいつの脳は機能しているのだろうか。
「あぁ、すまん。孤児院に行くか、それとも――化物狩り？」
エルのなかの何かがプッチンした。いい加減にしやがりくさってほしい。お陰様で意識がはっきりしてきた。
「……ふざけていらっしゃいやがりますか？」
つい、敬語になってしまった。助けてもらっといてなんだけど、こんなアホウにはもったいない。
だが、誰かさんはふざけてるわけでは無かったらしい。口調は真剣そうに、なにが？　なんて逆に聞いてくる始末だ。
「いや、イエスかノーなんでしょ」
誰かさんが考えに考え抜いたせいで、だいぶ時間が経過したがようやく分かったようだ。
「で、お前は孤児院？　化物狩り？」
こいつ全然分かってなかった。でも、このままツッコんで続けるのは不毛なのでやめておいた。

時間をください。
そう言ったつもりだった。
いつものパターンで時間を貰い、この最低最悪な夢を少しでも解明しようと思ったのだ。
それなのに、口をついて抑えきれぬ本心が出てしまった。

「殺したい。化物どもを、一匹残らず、無残に残酷に惨めに殺してやりたい」
さっきまではこっちが無残で惨めな死体にされそうだったというのに。
そう思うと、自分に呆れ果てて笑いが止まらなくなった。曇りの無い、溢れ出さんばかりの大笑だ。
同時に、誰かさんもニヤッという感じで笑った。
「決まりだな」
エルはようやく深い眠りに落ちた。
＊＊＊＊＊

００１　化物共に告ぐ（後書き）

処女作です。
勢いで考え、勢いで書き始めてしまいました。
多少の目処は立っている、その程度です。

短いですが最後に。
この作品が読者様の暇潰し、あるいはそれ以上になれますよう努力させていただきます。

＊＊＊　２０１１／１０／８　重大なお知らせ＊＊＊
実は、第一話から少しずつ不安が降り積もってきていたのですが、遂に山となってしまいました。話を進めようとすると、どうしても難しくなってしまうのです。
『女性主人公』
これが非常に大きな枷となり、私では手に負えませんでした。稚拙な文がより酷くなってしまうのです・・・・・。
もちろん、この物語を終わらせるつもりはありません。まだ始まってすらないですし。
そんな訳ですので、突然ですが主人公を男性にさせていただきます。
まだ二話までしか掲載できてないですし、読者様も少ないので大丈夫かな（？）とか思ってたりします。ご容赦ください。

本当に申し訳ありませんでした。

００２　朝っぱら

＊＊＊＊＊［ヴァンラル王国　元首都レーベ］

嫌な夢をみてしまった。

忘れてしまいたい過去。それは心に深く埋め込まれた刃のようだ。触れようが触れまいが痛みだす。

いっそ、全て消してしまえれば楽だろうに。何もかも無かった事にしたら、気楽に生きられそうだ。

だけど、それができたら苦労しないというものだ。もはやその記憶は俺の一部であり、それが無ければ俺ではない。

だから、人は柱を立てる。自分が崩れてしまわぬよう、支えられるくらい大きいのを。その柱は人それぞれで、仲間だったり、大切な誰かだったり、何かの目標だったり――復讐だったりする。

頭では理解しているつもりだ。ありきたりだが、いくら化物を殺したって両親も故郷も還らない。気持ちは一時的に晴れるけど、それは対症療法のようなもので、原因は残されたままだ。その原因さえ明確にできないのがもどかしい。

それでも、俺は化物を憎む。殺してやりたい。たとえ、幾千もの屍を積み上げたって何も変わらないだろう。それでもいい。ただ、折れてしまわないように。

――それにしても体が重い。重力とやらがいつもの倍以上になったかのようだ。

精神と肉体は少なからず繋がりがあると云われている。

久しぶりに宿屋に泊まって、ふかふかの布団で寝たから、体調は抜群のはずだ。

だとすると、あの夢のせいなのか。最低で、重くて、投げ出したくて、でも捨てられなくて。頻繁に見るというわけではない。ふと

した折に、忌まわしい過去を刻み付けるかのように傷を抉っていく。今まで何回か見てるから慣れたと思ってたのに、やはりそうでもなかったということか。

――ぐっ……。からだがッ……。重い、重すぎる。

病気でも拾ってきたのだろうか。体の一部、具体的には腹部あたりで圧迫されるかのような違和感がする。揺れている気もする。

幻聴も聞こえてきた。

「――ル！　――て」

揺れが酷い。このまま道半ばどころか、建設中にて終わるのだろうか。

「――てば。もう……！」

揺れたなんてものじゃなかった。布団の温もりは消え、体は宙を舞いごろごろ転がって、頭がなにかにぶつかったみたいでいい音がした。

「いっつぅ……」

文字通り頭を抱えて、じたばたしていると痛みがほんの少し和らぐのは不思議だ。

「あ……やりすぎちゃった。ごめんなさい」

聞きなれた声によって、精神が現実（リアル）に戻ってきた。

「でも、起きないエルが悪いんだよ」

お陰様で目が覚めました、ばっちりと。鈍痛のおまけはいらなかったが。

少女にみえる彼女は、エルの乗っていたシーツを手にして立っている。まさか、そんな荒業で叩き起こしてくださっちゃったのか。思い切りがいいと言うか何と言うか、小悪魔め。

「今日はＧ６にいくんでしょ。それに――って……泣いてるの？」

「え？」

泣いてる……？　目の辺りを手でぬぐってみた。確かに、水分が付いた。心なしか、頬のあたりで水が自然乾燥した独特のあの感じがする気もしないこともない。それでは、あんなので涙を――、いやいやそんなはずはない。絶対に認めない。

きっと、頭をぶつけた拍子に涙が出ただけだ。頭への衝撃は涙腺を刺激しやすいっていうし。

混乱しかけたエルは、自分までも欺かんばかりの会心の一言を発した。

「ところで、あんたは誰だ？」

何の突拍子もありはしない。一抹の希望をかけて、強引に話を逸らす。

苦しいなんてものじゃないが、果たして彼女には効果てきめんだったようだ。現に、だいぶうろたえている。

「当たりどこが悪かったのかな……？　――わたしはミリィで、だいぶ前にあなたに助けられて、それで一緒に旅してて、――」

なんと、大真面目に自己紹介を始めてしまった。面白いやつだ。

ミリィというのは愛称で、本名はミリア。薄い栗色の髪を腰の辺りまで伸ばしていて、顔つきからは活発そうな印象を受ける。そんな印象とは反対に体つきは細く、子供のように背が低くて、吹けば飛ばされそうなくらい軽い。詳しく聞いてないが、年齢的には子どもでないらしい。だがなんであろうと、絶世の美少女というやつだろう。少女っていうと、身長さえあれば……ってちょっと拗ねるのもまた愛嬌がある。

このままいじるのもありか？

だめだ。今にも泣き出しそうだし。流石に泣かせたくはない上に、罪悪感が、な……。

「すまん、からかっただけだ。起きるから許してくれ」

「そっか、良かった」

なんでだ。妙にあっさりしてやがる。

「ああ」
「うーん。なにかがおかしい様な気もするんだけど……」
ミリアは軽く首をかしげ、頬の辺りに人差し指をあてて考え込んでいる。その動作は小動物めいていて、さしずめ小鳥といったところか。だが口からは中々の毒が出てくることがあるから、毒鳥？なんか嫌な響きだな。これ以上考えるのは止めておこう。
そろそろ涙を誤魔化した事に気づかれるかもしれない。いくらこういう事に鋭い感性が無くても、たとえ無さすぎたとしても、いい加減分かってしまうだろう。
ここは冷静に、落ち着いて、さも当然であるかのようにいけば大抵押し切れる。
「……気のせいだろう」
だが、そんな微妙な努力は無駄に終わった。聞こえてないんじゃ意味が無かったのだ。
「……あ！」

あまりに唐突で、何をされたのか分からなかった。
この感触は。あたたかい。ふんわりしてて、柔らかな感じがする。どうやらミリアに抱かれているようだ。
まだ座ってたから、ちょうど顔がぺったんこ――もとい、胸のあたりにうずめられている。
視界はふさがれてて見えないし、ちょっと息苦しいけれど、あたたかい。
なにかにすっぽり包まれて、全てが許されたような、そんな気分。
だいじょうぶだよ、って。背中をそっと叩いてくる。
やばい。反則だろ。
ミリアがくっついてくるという事は滅多に無い。やはり、俺が悪夢を見たことを悟ったのだろうか。短くはない付き合いだし、その可能性は大いにある。
だとするならば、ちょっと悔しいところだ。俺はミリアの事をあ

まり知らない。知っているのは魔術師(マギ)であることと、どこかでいい嫁(こども)になるだろう事と――重い過去を抱えているらしい事くらいだ。

負けっぱなしは趣味じゃない。なんて、ちょっとどころでなく青カビが生えてそうな言葉だ。それでも俺は。

「よっと」

ミリアの背中に手を回して、そのまま立ち上がる。仕返しの抱っこというやつだ。

「きゃぁ！　ちょ、ちょっと！」

もちろん軽く抵抗された。でも、突き放す感じじゃなくて妙な感じがした。これは、嬉しいってやつか。

このくらいで降ろすはずだった。

今回は違う。仕返しだから放さない――それもあるが、もう少しまともな理由がある。

エルは思案に暮れていた。

軽い。あの時より軽い気がしてならない。体重が減っている……？

食事はしっかりとっているはずだ。栄養なんかも一応は偏ったりしないように、大きなお世話ながらも気にしている。

ミリアは体つきがほっそりしてるし、小さいけれど、それ相応よりは力がある方だと思う。

寝不足って事も無いだろう。野宿でも見張り役を任せた事は無い。

うーむ。

――。

――。

いくつかの自問自答を繰り返した末、結局たどり着いた答えはこれだ。

今、確かに腕の中にいる。このぬくもりが何よりの証拠だ。だから――――。

「ありがとな」
そう笑って言ったら、びっくりしたのか顔をそらされた。
もう少しだけ、癒しをください。そうしたら、まだ立っていられる。
……ってこんなにちっこいのに何を求めてるんだか。
俺がこんなでどうする。あの時決めただろうが。絶対に守り通してみせるって。
ミリアは弱くないどころかアホウなんか瞬殺だろうが、どこか抜けているところがあってたまに心配になる。
俄然、やる気が沸いてきた。何に対してとか、はっきりしないけど良しとする。
ミリアを降ろしてから、念のため再度目を拭っておいた。
「もう朝食の時間か。ちょっと過ぎてる？　まあとりあえず、いくか」
「……うん！」
部屋を出て階段を降り、1階の食堂を目指す。
レーベの北東に建つこの宿屋は、コンセプトだという『森の中』をそれっぽく表現している。全てが木製でできていて、世でありふれているレンガだとかなんだとかは一切使っていない。コップから皿、何から何までもが木製で、エルからの評価は高かった。ただ、どうして木製にこだわるのかを先程聞いて後悔した。経費節約のためと、いつか燃えたとしたら壮観だから、だそうだ。
食堂はたいして混んでいなかった。こんな街に建てたのだから、客もなかなか来ないのだろう。ゲート付近の街なんて危険で、それはもう襲撃者（アサルター）か街に愛着のある奴か変人くらいだ。他にも宿はあるわけだし。エル達もたまたま通りかかって、たまたま木造の宿だったからここに泊まっただけだ。
それも、今となっては他が木造であろうとなかろうとこの宿には

二度と泊まらないことに決定している。
しつこい事に、食堂の壁にいくつか燃えている森の絵画が飾ってあるのだ。結構上手く描いてあるから、余計に腹立たしい。
「燃える森、か……」
――あ。
口をついて出てしまったので、しまったと思った時には遅かった。今度はうまく誤魔化せるだろうか。
「……？」
「ああ、すまん。ちょっと思い出しただけだ」
「やなこと……？」
「いやいや、大した事じゃない」
「ほんとに？」
「ほんとに」
今朝の事があったからなのか、ミリアの視線が少しだけ痛い。困ったような、何かを探るような、それでいて踏み込んでもいいのだろうかとか迷う目だ。
おぼろげにだが、少し分かる気がする。
情けない事に、俺もミリアの事は詳しく知らない。聞くのを恐れてる。
なんとか助けになりたくなる。痛みを和らげてやりたくなる。それなのに、やれる事なんて何も無い。
自分がいかに無力であるかは、知りたくない。もう痛いほど思い知らされた。
きっと、ミリアが聞きたがったら弱い俺は話してしまうだろう。また、俺が聞きたがったらミリアは話してくれるだろう。
それでも、互いに進んで聞くような真似はしない。自然と話してくれるのを待つ方が楽で、お互いの為にいいからだ。
抱える傷を一緒に背負う事はできない。勝手に重いと思う事ならできる。だが、それは助けでもなんでもなく、空虚な重さを作り出しているだけだ。一緒に背負うんじゃなくて、自分に加重しただけ

の、ちっぽけな自己満足にすぎない。

――なんてな。朝っぱらから何考えてるんだか。あの夢のせいだろうか、ちょっとブルーだ。

青くなってる場合じゃないのに。

先程ミリアに言われて思い出した。そういえば、今日はG6にいく予定だったのだ。忌まわしき化物共が蔓延る、最低で甘美な世界に。

災厄の齎し手？大門？

数百年前、突如として大量の化物と共に地上に舞い降りたという巨大な門だ。門というより、背の閉まったアーチといったほうが形状的に近いかもしれないが、間違いなく門と言い切らさせる何かがある。

その数、十一門と半。降りてきた場所に規則性は無い――のだろうが、結局のところ真意は不明だ。なぜ、どのように現れたかさえ分かっていない。あまりにも突然すぎたのだという。

大門の位置は、はっきりいってでたらめだ。長方形のテーブルを地図に見立てて丸い玉を一斉に転がし、玉が止まったところで出現した、みたいな感じだ。どんな仕組みか知らないけれど、海上に浮かんでいるというか立っているのも発見されている。それが魔術的だという説もあったし、神のいたずらだとかいう説というか宗教みたいなのもあった。なんにせよ、詳しい事は誰も分からないのだろう。

大門はいずれもが白く輝き、荘厳としか言えないような空気を醸し出している。文字と思われる彫刻の類もあるが、現在でも数字であろう形のものしか意味は分かっていない。いや、勝手に数字とみなしただけだからそれも怪しいところか。とにかく、その解釈を元にそれぞれ番号を付けていった。ゲート1、つまりG1、G2・・・

・・・といった具合に。
ゲートの内側は、別世界が広がっている。比喩でもなんでもなく、別世界そのものだ。どのくらい広いのかは不明だが、Ｇ８のようにダンジョンと呼ばれるような洞窟状になっているのもあれば、Ｇ１１のように太陽があり海もあり、といったところもある。
せっかく別の世界が広がっていて、新しい土地があるにも関わらず人類が進出できていないのは、どこも例外なく化物が蔓延っているせいだ。この世界にも、少なからず化物は沸くし、ゲートから堂々と出てくるやつも居るけれど、向こうはその数が比になっていない。そんなにぽんぽん出てこられては村だろうが街だろうが直ぐに廃墟となるだろう。
幾度となく、それぞれの国の騎士団や、化物狩りやギルドが連合部隊を編成して攻めた記録があるがどれも惨敗の模様。原因は化物の多さだけでなく、食糧問題だとか何だとかもあったようだが、結局だめなものはだめだったのだろう。

だが、ゲートを攻めたのは無駄とはいえない。多大な被害を出したらしいが得るものがあった。危険極まりないし何があるか分からないが、なにかがある事は判明したからだ。具体的には、ほとんどが未知の物で、鉱石や植物、魔術の触媒、はたまた化物の体内で生成される不思議物質とかだ。
ゲート内を制圧する事は不可能。定住するのも不可能。それでも、そこにあるモノには需要があった。
そこで次第に出てきたのが、襲撃者（アサルター）と呼ばれる者達だ。ありていにいえば、強奪者か。
襲撃者（アサルター）はゲートに入り、主に採取と強奪を行う。採取だけが目的の人もいるにはいるそうだけど、化物に出くわさない事は滅多に無い。だから同時に化物と殺りあうことになる。
化物は基本的にヘンテコな装備をしている。見目形もヘンテコなので仕方ないのだが、奪った装備をそのまま使うというのは無理に

近い。けれど、その素材には結構な需要があって高くつきやすいし、鉱石や宝石などを持っている事も少なからずある。だから、上手くやれば結構儲かる。一攫千金狙いとかで、採取をそっちのけて化物だけ狙うなんてこともざらにあるほどだ。

だいたい、本日エル達がＧ６を襲撃しにいく理由が正にそれ、強奪だ。化物を殺って、気分爽快で懐も温まるなんて至れり尽くせりじゃないか。

ミリアには付き合わせて悪いと思っている。本当は宿に残していきたいのだが、こんな街だし、そもそもミリアが置いてかれるのを嫌がる。

化物（あっち）狩り組織もたまには仕事をくれるし、実入りはいいけれど、足りない。はっきりいって、金なんてどうでもいい。気分の方が大事だ。

化物を殺すあの感覚が薄れていくと、胸が、血が、体が――なにからなにまで騒いでしょうがなくなるのだ。抑えきれない。案外、禁断症状なんてのが出たりして更にブルーに――。

だから青くなってる場合じゃねえ。

気づいてしまった事がある。問題発生だ。いや、昨日の時点で問題は発生していたという方が――ってどうでもいい。落ち着け。まずは情報の整理だ。現在九時三十七分。現在地、二度と来ないであろう宿屋。

今日はＧ６を襲撃する。そこだ。問題はそこにあり！

――落ち着け。とりあえず深呼吸だ。とにかく平常心を保ち、最善の選択をしなければならない。

すーはー　すーはー

すーはー　すー「ほんとにほんとにだいじょうぶ？　病気？」……はっ

……。

「いやいやそうじゃない。いや。そうなんだけどそうじゃないというか……」

一呼吸置く。時間が必要だ。

「ちょっと待ってくれ。整理するから」

エルは手をあごにもっていき、悩める男的な仕草をした。これは時間稼ぎだ。稼いでどうする。

とにかく、早口で一息に言い切った。こんな時、目を逸らしちまうのは仕方ないよな。

「白魔術師（しろマギ）の募集かけるの忘れてた」

「……やっぱり」

やっぱり、ときたか。ミリアは呆れた表情をしているが、しょうがないなという感じの目をしている。まさか予想されていたのか。

「というか、人数足りてないんじゃない？」「ぐっ」

「そもそも、白魔術師（マギ）が都合よくこの街にいるかな」「……」

ぐーの音しかでないとはこのことだ。

すっかり人気が無くなった食堂は、一層深い沈黙に包まれた。店員の食器を洗う音だけが虚しく響く。

これから募集しても間に合うだろうか。

００２　朝っぱら（後書き）

書きたいことは決まっているのに、うまく伝えられるかどうかという不安。
地図を描かないとまずいのに、変なのしかできないという残念感。
ｅｔｃ．．．
様々な問題をはらみながらも、二話です。
とても遅くなりました。大変申し訳ないと思っています。
正直、書き溜めはしておくべきだと痛感しました。時既に遅しですが。
さて、嘆いていても始まりません。
これからも気合を入れて執筆していきます。

＊＊＊　２０１１／１０／８　重大なお知らせ　（第一話にも掲載しました）＊＊＊
実は、第一話から少しずつ不安が降り積もってきていたのですが、遂に山となってしまいました。話を進めようとすると、どうしても難しくなってしまうのです。
『女性主人公』
これが非常に大きな枷となり、私では手に負えませんでした。稚拙な文がより酷くなってしまうのです・・・・・。
もちろん、この物語を終わらせるつもりはありません。まだ始まってすらないですし。
そんな訳ですので、突然ですが主人公を男性にさせていただきます。
まだ二話までしか掲載できてないですし、読者様も少ないので大丈夫かな（？）とか思ってたりします。ご容赦ください。

本当に申し訳ありませんでした。

００３　?元?首都（前書き）

２０１１／１０／８（土）あたりまでに一、二話まで読んでくださった方へ。
大事なお知らせがありますので、お手数ですが先に一話もしくは二話の後書きをお読みください。

003　?元?首都

＊＊＊＊＊＊［ヴァンラル王国　元首都レーベ］

レーベはヴァンラル王国の首都だった。

都の中央には?鉄壁?ヴァンラル城が建ち、その周りを囲うようにして城下町が広がっている。

王城のすぐ東側には、常備軍である王国騎士団第一屯所が配置されている。屯所の造りは質素そのものだが、騎士達の一人一人に装備等結構な金が掛かけられ、良質な訓練が行われていた。

レーベの東西南北それぞれの端には、王国魔術師(マギ)研究所が建っている。北から時計回りに第一研究所、第二研究所、――となっている。そのいずれの場でも、首都防衛において最重要である盾の維持と調節をしていた。盾とは魔術結界の事で、レーベをぐるりと囲むように作られた防壁の内外部に魔術の盾を展開し強度を大幅に上昇させるというものだ。これにより他国の侵攻が首都レーベに及んでも、被害は大したものでなくなるという寸法だ。

魔術結界は、物理的に破壊するには難しい仕組みになっている。理論的には単純明快なことに攻撃するだけなのだが、もともとが非常に強固なのに加え、受けた威力を分散させるようになっているからまず無理だ。魔術的に破壊するには結界を上回る魔力量で臨まなければならないのだが、それがまた難儀なもので。

魔術師(マギ)が決して多くはない存在であるということだ。

数百年前、大魔導師(ウィザード)ロンギー・ジョーが世界にばら撒いたという有名な魔術本の一説によると、『材料(マテリエン)は知識を蓄え、技術を磨き、切磋琢磨して虚なる限界を超越することで魔術師(マギ)に成る』のだとか。

材料(マテリエン)とは、表記によると魔力を感じることができる者のことだ。

ちなみに、色々と改名されてきた歴史があるみたいで現在は魔力者（マージ）と呼ばれている。
魔術師（マギ）が希少である理由はここにあり、魔力者（マージ）の数、つまり魔術師（マギ）になりうる者の数が人類の１％にも満たないということだ。魔力を感じとれるかどうかは、母体の腹にいる時から既に決まっているらしいので才能としか言いようが無い。そうなると、数を増やそうにもどうすればいいのか分からない。更に、魔術師（マギ）になる過程で切磋琢磨だかでふるいにかけたら、本当に少ない計算になる。

そもそも国についてくれる魔術師（マギ）なんてのもまた希少種だ。彼らのほとんどが思想、感情、考え方などにおいて世間一般とかけ離れていて、現代でも手に負えないそうだ。
だから、結界を壊すためとはいえ希少で貴重すぎる魔術師（マギ）を総動員するなんてことはできなかった。もし動きが読まれていて、一網打尽にされたら目も当てられないからだ。
それに、たかが一国が魔術師（マギ）を全員集めて結界の破壊に取り掛かっても無駄だったと云われている。後々に知られだした事だが、鉄壁の異名は伊達じゃなかったということだ。

？大門（ゲート）？が付近に降りてきて、現代まで物理的（ハード）に廃墟にされていないのはレーベだけだ。それも、レーベ付近に降りたのはＧ５とＧ６の二門。
これに対するレーベの凌ぎ方は、やはり結界だ。破られたら最期なので、二重三重に合わせた結界を幾重にも張り巡らせてより強固なものにしたという、非常に単純なものだ。

だが、言うは易し行うは難し。
過去のことだから多少なりとも尾ひれがついているだろうが、少女のような彼女曰く相当ぶっとんだ話だという。でも、それくらいでないととっくに滅んでるとか云々。

結界、というより同系統魔術を近似座標に連続発動させるのは魔術力場における魔術相互干渉による魔術相克によって――――

このちっこい魔術師（マギ）の見解と説明はとんでもなく長いので耳から血がでる。

なんて正直に言うのはベターじゃない。やんわりと、だがこれ以上は勘弁というのをほのめかしつつ別の話に持っていくのがベストだ。

「魔術だかなんだか知らんが、結局この街廃墟じゃないか？」

どうだ。我ながら完璧すぎるタイミングだった。

「なんだか、じゃなくて同系統の魔術を近い場所に連続で発動するのは不可能って云われてるってこと。エルも軍人なら魔術の基礎知識くらいはあるでしょう？」

普通に返されてしまった。恐るべし、魔術師（マギ）……！

しょうがないから生返事してやり過ごそうかとも考えていたのだが、聞き捨てならない言葉があったので訂正を求める。一度でも認めると、大袈裟だが引き返せなくなる気がする。

「軍人じゃない」

「似たようなものじゃないの？」

「違う」

「でも――」

「軍人じゃない」

「……参りました。た・だ・の化物嫌い、だよね」

一々毒を吐くのが好きなみたいなので、つい毒で制そうとしてしまう。

「はいそうです、ちっこいマーギさん」

「ッ……」

毎度の事ながら、死線（デスビーム）を感じたので横をみやったらミリアが頬を膨らませてにらんでた。なんか理不尽だ。

それにしても、こんな時に軽口を叩くのは我ながらどうかしてると思うが、仕方ないと割り切っている。きっと、これも何かの作戦だったんだ。

目の前に柄の悪い男が四人。全員得物を抜いていて、脅しのつもりか構えるでもなくちらつかせている。痩せ気味ノッポに鼻長一号と二号、そして禿頭の筋肉男といったところか。

対するエル達は二人だ。一人は立ち上がり気だるそうな顔をしている。もう片方は小さく溜め息をつき、嫌悪感をあらわにしている。

壁にもたれていたため、完全に囲まれていた。

「ようようお二人さん方。ちょっといいですかァ？」

全然良くない。どう見ても募集に乗ってきた感じでないので、面倒事の予感がひしひしとする。

アホウ共の沸き方、身なりから察するに、こんなとこに乱暴狼藉を働きにきたのか。いくらレーベが過疎だからって、せめて場所を選んでほしいものだ。

レーベの西口を出てそのまま直進するとG6があるから、襲撃者（アサルター）を募集するなら西口広場と相場が決まっているのだ。そうすると商人は旅に必要な道具とかを売りにくるから、軽度の人ごみの完成だ。こんなところでドンパチ殺（や）らかしたら……。

この筋肉男がアホウ共のボスなのだろうか。やたらでかいし、いかにも脳まで筋肉で考え無しといった感じだ。他のアホ三匹は後ろでにやにやしたまま動かない。指示を待っているのだろうか。

すぐに返事をしなかったせいか、筋肉男が更に前進してきた。むさくるしい。

「無視ですかァ？　それともビビッて声もでねぇってやつ？」

「ああ。怖くて怖くてたまらねぇ。ここは一つ、見逃してやってくれやがりませんかね？」

これは結構本気（マジ）で言ったつもりだ。

だいぶやばい。

なんでかって、いまだに足伸ばして座ってる奴の死線（デスビーム）がどんどん険しくなっているせいだ。アホウ共の標的が魔術師（マギ）である自分だと勘付いてて気分が悪いのは理解してやりたいが、ここでぶっ放したら後が大変な事を考慮してほしい。二人揃って要注意人物扱いされるのは目に見えている。

とはいえ、怒ったミリアを宥めるのは骨だ。なかなか話を聞かないし、巻き添えなんて可能性も出てくる。

だから、早く退散してほしい。面倒事になる前に。

「そうはいかねェ、聞いちまったんだ。そこの餓鬼ィ、マァジなんだろォ？」

餓鬼っていいやがった。我慢の限界か、ミリアが震えている。これでもよく持ちこたえた方だ。

それにしても、筋肉男のこの発言で頭の隅に引っかかってたことの納得がいった。

ミリアが魔術師（マギ）と知りながら出てきたなら、速攻で仕掛けてくるはずだったのだ。詠唱の時間なんか与えたら間違いなく殺される。なのに、こいつらときたら剣だの槍だの出すだけだった。

なんだよ。悩んでた俺が馬鹿みたいじゃないか。このアホウ共はいったいなんのつもりかって、な。もしかしたら、とんでもなく強いかもしれないって期待していた。

それなのに、マギとマージの聞き違いだと……。

俺までむかむかしてきた。この際、どうでもいいんじゃないか。このアホウ共見るくらいなら、二人でＧ６に行くってのも悪くない気がしてきた。

「なあ、ミリィ」

「なによ」

ああ、これは完全に怒ってる。キレてるといってもいい。

「今日さ、俺とデートってのはどうかな」

「！　……い、いいよ」

さっきまで怒り心頭だったミリアが嘘のように落ち着いているので違和感を覚えたが、キレてるよりはいい。
「よっしゃ、じゃあささっと蹴散らしますかね」
「え、どうして？」
落ち着きすぎだろ。上の空と言ってもいい。アホウ共なんて初めから居なかった、みたいな。
「どうしてって……デートってことは二人きりで、だろ？」
当然だ。ここで暴れたら募集も何も無い。いくら変人率が高めなレーベでも、やはり危険そうな奴らにはついていかないだろう。
「……うん」
「つまり白魔術師とか無しで――」
「待って」
静止命令が入った。
話を遮ったのか、それとも動き出そうとしたアホウ共の勢いを挫こうとしたのかは分からない。
「まさか、さ。一応確認しておきたいんだけれど、行き先はＧ６！とか言わないよね？」
前者だったようだ。結果的にアホウ共も停止したが。
「なんで？」
ますます分からない。Ｇ６以外、どこに行くんだ。案外、南方のＧ５の方が好みだったりするのだろうか。
「……はぁ」
でかい溜め息だ。呆れ半分、怒り半分といったとこか。ついでといわんばかりに、詠唱まで始めている。
なぜだ。意味不明すぎて混乱しそうだ。何でまた怒り出してんだ。魔術師だからか。不安定なのか。
筋肉男の少し後ろ辺りにまぎれ、エル達にとびかかろうとしていた鼻長兄弟が突然凍り付いた。全身が霜に覆われて氷の彫像と化している。

相変わらず凄まじい冷気だ。近くにいる筋肉男とノッポは堪らないのだろう、物凄い震えている。
結局、デートになりそうだ。少し離れたところでこっちを見ていた野次馬達が一目散に逃げていった。これはもうアウトだ。
「な……ま、待ってくれ！　頼む！　ほ、ほら、降参だ！」
今まで黙っていたノッポが降参の意を示し、剣を置いた。筋肉男も慌てて槍を捨てた。さらに、頭の後ろで手を組みだした。何の技だ……？
「見逃してくれェ！　このとおりだァ！」
もちろん見逃すつもりなんてなかった。もうアウトなんだから、余計な事を考えなくて済む。
背中にくくってある大剣に手をかけ、二人同時に両断した――はずなのだが。

奇跡が起きた。

エルが大剣を振る直前に、アホウ二匹が目にも留まらぬ速さで正座して頭を下げたのだ。この行動のお陰で、二匹とも間一髪死を免れた。
明確な殺意をもって振るった剣を、こんな風にかわされた事は無い。
土下座というやつか。話に聞いたことはあったが、本当に面白い技だ。賞賛に値する。
殺るつもりだったが、いいものを見せてくれたので無性に見逃したくなってきた。
だいたい、募集をかけたその日に出発なんてのもそうそうない話だから無害、ってことにしよう。
直ぐにミリアを静めなければ。
「なあ、ミリィ」
先程と同じ話しかけ方をしてしまったが、いいのだ。少しでも気

を散らしてくれれば。
「今度はなに」
「愛してる」

刹那、体が宙を舞った。反応しきれなかった。とんでもない威力だ。
アッパー？　そんな生温いもんじゃない。あれは、竜種さえも昇天させるという昇竜拳ッ……！
なぜそんな大技を？　そんな細腕のどこに力が？　なぜ俺に！？
情けなくも、エルは華麗に吹っ飛ばされてそのまま大の字に倒れた。
矛先の向かなかったアホウ二匹は、もう人ごみの中だ。氷の彫像二つと、剣、槍は残されている。逃げ足が速く思い切りがいい、悪くないな。いや、悪党だけど。
取り敢えず座り、見上げると顔を真っ赤にしたミリアがいた。キレてるのか、これは。
「きゅ、急になによ！」
そんなにまずい事をしたのだろうか。愛してる、なんかで反応するとは思えない。
だとすると、――――分からん。
「なにが？」
「ぁ、あ、あい、――ッ！」
新種の発破とともに、鋭い回し蹴りが飛んできた。ミリアは背が低いの、そのままでも頭部直撃コースだった。昇竜拳の事もあるし、さすがに痛そうだったから体を倒してやり過ごした。
追撃はこないようだ。ミリアは余計赤くなり、肩で息をしている。そんなに疲れる技だったのか。

しばらくして起き上がり、大丈夫かと聞くとだいじょうぶと返ってきたから少しは回復したようだ。

結局なぜキレたのか分からないままだが、過去は振り返りたくない主義だ。大事なのは、これからどうするか。
「今は……十二時過ぎか。飯くってから二人でＧ６ってことでいいか？」
二人でってところで、またもミリアが反応したのでつい身構えてしまった。そんなに嫌か。
「そうね……そうしましょう」
返事はオーケーだったので一安心する。
昼食は露店で簡単に済ませることになった。
ついでに、傷薬とかも買い込むことに。白魔術師なしで行くからには、しこたま持って行かないと酷い事になりかねない。
途中、視線を感じたり指をさされたりしたが気にはしなかった。なんだかんだで人間二人を凍らせたから、分かっていた事だ。たとえミリアが魔術を使わなくても、飛び掛ってきたからには何枚かに卸してやるつもりだったのだが。

レーベで刃傷沙汰や殺人などは、あくまで他の街に比べてだが問題になりにくい。本当は、殺人なんかしたらすぐに知らせが入って騎士がやってくるところだ。
堂々と二人を凍死させたのに何も起こらないのは、この街にその騎士がいないからだ。王からはじめ、誰も彼もが、とっくに首都だったこの街を捨てている。
かつて居たという、王国騎士も王国魔術師もいない。残されたヴァンラル城は荒らされて金目の物は当に無く、王国騎士団屯所や王国魔術師研究所は虚しく建っているだけだ。
レーベ南東にある大聖堂とやらは、現在も狂信者といって差し支えない人々に守られている。
まさに、元首都の理由。
廃墟。
現代でも、物理的な被害はほとんど見当たらない。もはや結界は

無いので、守ろうとしなければ崩れる事間違いなしだが。
別の意味で廃墟となったのは、街を維持できる人数が足りなくなったのと、狂信者達が原因だ。
昔々、化物共の第一陣というかあらかたが殲滅された時に、レーベに住んでた民がこぞって別の街に逃げたそうだ。結界があるから大丈夫なんていっても、そもそも大門(ゲート)が近くにない方がいい。その唯一民を引き止められる可能性のあった結界も、人が減っていくにつれて何故か弱まり、遂には消えてしまったというのだから笑えない話だ。
そうこうしている内に、自ずと取り残された者、どうあってもここに残る狂信者が住まうようになった。未だにレーベ再興が始まらない原因の種達だ。
取り残されて以来長く住みようやく出て行ける金が溜まって離れたがまた帰ってきてしまったという酔狂な露店主に聞いたところ、狂信者達は大聖堂付近に集まり、来る日も来る日も飽きずに祈りだの儀式だのやっているそうだ。
祈りとかを捧げているだけならいいのだが、彼らはこの街を見捨てて逃げ出した者達を断固受け入れないらしい。そういう信条だか宗教なのかもしれない。なんにせよ、武装までしているので本気なのだろう。先程ちらっと見えたけれど、騎士並みの装備をしていた。
それにしても、現ヴァンラル王国が狂信者達からレーベを奪還しない理由が気になる。化物の出現も落ち着いてきていて対処のしやすい今なら、結界が無かろうがゲートが二つあろうが防衛は可能なはずだ。それも、容易く。なのに、なぜ放置しているのか。
情報が足りない。そもそもエルにとっては至極どうでもいい話なのだが、一度気になるとある程度は解明したい派なので買い物ついでに聞いて回る事にした。
――

昼食兼買い物を済ませ、西門に辿り着いた。
ここまで成果は無し。実は狂信者が化物みたいに強いとか、神が怒るからとか、作ったにしてもくだらない事ばかり聞かされてしまった。
今日の目的はレーベについて調べる、じゃないので馬車を探す。
門の外を見やると、丁度返ってきた風な馬車を発見したのでいつ出発か聞いたところ、後三十分ほどのようだ。
馬主が二頭の馬になにかしているのが気になり聞いてみたのだが、無視（スルー）されてしまった。集中してるっぽいから聞こえてないのかもしれない。

「行く前に作戦立てとくか」
「ええ」
どうして最初から呆れ顔なんだ。その小悪魔のような頭の中で、いったい何を予測しているんだ。
小一時間ほど問い詰めたいところだが、どんどんずれてしまうのは分かりきっているのでそのまま進める。
「俺が前衛。ミリアが後衛兼自衛」
「うん」
「そんでもって……」
「……」
沈黙。
しまった。これは作戦なんてものじゃない。攻撃方法からして、二人しかいないから動きも自ずと決まってくる。
仕切り直しだ。
「確認しておくか」
「ぷっ」
「笑うんじゃねえ！」
「だって……だって……ふふっ」
ぐぬ……我慢だ。

耐えろ、大人の対応ってやつを見せつけてやれ。
「俺がお前を守る。ついでに化物を殺(や)る。そんでもってお前は魔術。オーケー？」
「オーケー。しっかり守ってよね」
「守られるほどやわじゃないくせにな。昇竜拳しかり回し蹴りしかり」
「あ……アレはたまたま出ちゃったの――っていうか昇竜拳てなによ！」
「俺がつけた」
「知ってるわ！　もうっ……」
ミリアは、本人曰くたまにだが、体格に見合わない強烈な攻撃が出る。実戦で出せたら、もはや前衛でも十分いけるレベルだ。
まあ、危なっかしいからできたとしても前は任せないけど。

「そろそろ行きますよぉ！」
威勢の良い声がかかり、エル達とその他の襲撃者(アサルター)と思しき数名が馬車に乗った。
準備よし、天候良し。心はまさしく晴天。
短いけど楽しい旅行になりそうだ。

００３　?元?首都（後書き）

女性主人公がお好きな方、申し訳ありませんでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7104w/

シなばもろとも

2011年10月12日14時50分発行